

山崎隆三さんの思い出

木下悦二

山崎さんとの交友は大阪商大弓道部で始まった。私の人生を大きく変えたのは山崎さんだった。自らは寺子屋育ちで「学校」には無知だった私の父は、私が商人になって家業を手伝うことを望んで、「商」と名のつく大学なら大学進学を認めるというので、理系好きだった小生もやむなく大阪商大を選んだ。

和歌山中学時代に弓を引いていたので、大阪商大予科入学と共に当然のように弓道部に入った。そこに一学年先輩の山崎さんがいた。大学に通う道筋が同じだったことから、親しくなった。文系の学問に何の興味も持たなかった私にマルクス主義への手ほどきをしたのは彼だった。弓道部で一年後輩の林直道さんも私と同じ轍を踏んだ。私はマルクス主義に近づいて初めて文系の学問に興味を持った。『資本論』を読まなくてはと考え、ある年の夏に高野山の宿坊に泊まって取り組んだものの、まったく歯が立たず、まことに初歩的質問の手紙を山崎さんに送って、懇切な返事を貰ったことを覚えてる。

学部進学後、私は弓道部から遠ざかって、高商部から進学

してきた同学年の羽岡栄之助さんに誘われて上林貞次郎先生が中心に組織されていた研究グループに加わるようになった。これがいわゆる「大阪商大事件」の中核になった。昭和一八年三月に始まった「事件」では、前年秋に半年短縮で卒業していた山崎さん達は検挙を免れたのに引き替え、三年生に進級していた小生は羽岡さんが亡くなってしまったため、あたかも学生の中心人物のように扱われる羽目に陥った。

戦後の混乱期には山崎さんは家業の海産物問屋を手伝っていたらしく、妹さんの言葉によれば、北海道の昆布の買付などでなかなかの商才を発揮していたそうだ。

彼が母校の教員、それも日本経済史担当に採用された経緯は承知しないが、学部時代の指導教授で中小企業論の藤田敬三先生が彼の研究能力を高く評価していたからご推薦されたのだと推察している。理論や文献だけに頼らないで「足で経済学を勉強する」ことの大切さを説かれていた藤田先生の学風を、山崎さんも彼の日本経済史研究に受け継がれていたのではないだろうか。

(きのした えつじ・九州大学名誉教授)